はじめての奥駈

2017.7.9～13

スタート地点は東吉野の西河

◆奥駈について

大峯山寺と熊野大社の間を駆け抜ける修験道の修行が奥駈で、その路次を奥駈道と呼ぶ。古来は詳しい道順や道中の霊地も秘されていたそうだが、近世になって教団の体制が整えられ、講のかたちで在俗の信者を巻き込む峰入修行も実施されるようになった関係から整備や情報の公開が行われていった。現代に伝わる 75 の靡(奥駈修行では祈祷を行う霊場を靡と呼ぶ)を巡りつつ熊野大社から吉野に至る行程(順峯、またはその逆行程＝逆峯)も近世末期までに整備されたもののようである。

20 世紀になって山岳地域がスポーツやレジャーの対象になってからは、宗教行為とは別に奥駈道を部分的にでも踏破する人は増え、道中の休憩所や標識などハイキング仕様での整備が行われるようになった。この傾向がいっそう進んだのは奥駈道を含む参詣道および神社仏閣が世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に登録された 2004 年からである。吉野山、山上ヶ岳、弥山など一部の山とコースは、それ以前からも観光客や登山者をたくさん集めていたので整備はされていたが、吉野金峯山寺・熊野大社間の奥駈道を改めて観光物件もしくは登山コースとして扱うようになったのは世界遺産登録の影響が大きい。

◆奥駈レポート（7/9 ～ 13）

今回の奥駈チャレンジは、北半分を逆峯で行うことを目標とした。吉野山から大峯山寺を経て釈迦ヶ岳まで行き、太古の辻から前鬼へと下る形である。奥駈本来の姿は熊野大社と吉野を結ぶものだが、距離の長さゆえに半分に切るケースも多い。前鬼で南北に分けるのは標準的なパターンのようだ。スタート地点を吉野山(＝青根ヶ峯もしくは金峯神社)としたのは、少しでも快適さを求めてのことである。型どおりに 75 番の靡から辿ると、六田の渡しから吉野神宮前を経て金峯山寺へ、そして水分神社から金峯神社へとなる。これは桜のシーズンに観光バスが通るアスファルト舗道で、徒歩で行くには快適ではない。それどころか、むしろ気が滅入ってしまう。長距離の計画なのだから、最初の 2 ～ 3 時間など些細なことと割り切らねばならないのかも知れな

蜻蛉の滝

い。しかし、どうせなら心地よく歩けるに越したことはない、というわけで宮滝から沢沿いのハイキングコースを通って上千本に出て、そこから水分神社、金峯神社と辿る計画にしておいた。

ただ実際には近鉄大和上市駅で下車した後、バスのアクセスが悪く、西河まで行って蜻蛉の滝のところから青根ヶ峯に突き上げるコースを歩くこととなった。R169 号線を走る路線が奈良交通バスの通常営業から切り離されてコミュニティバス（R169 ゆうゆうバス）になっていたことに事前の下調べが及んでいなかったせいなのだが、この東側からのコースは宮滝に比べると心地よさは劣るものの、終始アスファルト舗道を歩くことに比べると格段に快適である。

蜻蛉の滝の「あきつの小野公園」から尾根道経由で青根ヶ峰に向かうルートは以前にも歩いているので、今回は音無川沿いの沢道から最後の急登を経て青根ヶ峰に突き上げるルートを選ぶ。登りが分散される分、尾根道の方が楽に感じられるが、季節柄、暑さで茹であがることを避けての選択である。とはいえ、沢沿いであれば風に恵まれると決まったわけでもない。むしろ尾根道に合流するまでの登高のキツさが印象づけられる結果となった。

尾根道と合流すると、そこは青根ヶ峰直下の舗装路が目の前にみえるポイントである。この道は吉野山の観光エリアを貫通するアスファルト舗道で、桜のシーズンには一般車両は通行できないが、オフシーズンなら自由に通行できる。それ以前に 2 本足で歩いている人間は規制の対象外である。ちなみに、この舗装路は奥駈道とほぼ並行するように南進して五番関トンネル経由で県道 21 号線につながって洞川温泉まで続く。

奥駈道のスタートを金峯神社にすると、西河から青根ヶ峰直下まで登ってようやくスタート地点が視界に入ってきたことになる。日帰りハイキングの基準なら 1 日分の行程を費やしてやっとスタート地点となったわけだ。ここから青根ヶ峰の三角点を越え、さらに金峯神社まで下りたところから本番が始まるのである。

金峯神社は吉野山中に散らばる山内堂宇の 1 つで、「紀伊山地の霊場と参詣道」という括りで登録された世界遺産の構成物件でもある。境内には拝殿と休憩所、それに社務所とトイレぐらいしかないので伽藍というほどのスケールはない。しかし吉野山の中ではもっ

青根ヶ峰の山頂直下に置かれた女人結界碑

とも標高が高い場所にあることから、吉野山そのものであるがのごとくの重みがある。建造物の荘厳さで訪れる人を圧倒する金峯山寺蔵王堂とは違った風格が漂う。拝殿より奥は入れないが、石段がさらに山中へ伸びているのが見える。その先にご神体が鎮座しているのか、それとも山域全体を神とみなしてシンボリックな何かがあるのか。

吉野山や大峰山は山域全体が修験道の聖地なのだが、金峯神社単体に対しては古くから金精大明神の名が用いられてきた。奥駈の靡（72 番）もその名前で呼ばれている。ちなみに境内の由緒書きには「金山彦命を祭る吉野山の総地主の神」とあるが、この記述では「金山彦命」と「総地主の神」であるところの金精大明神との関係が分かりづらい。

金峯神社で行程の安全をお願いして、いよいよ出発である。拝殿の右手に伸びる道を進み、奥千本方面に向かう分岐をやり過ごして道なりに行く。しばらくすると左手に女人結界碑が見えてくる。慶応元年（1865 年）に置かれたことが確認できる結界碑で、碑面には「右　大峯山上」「左　蜻蛉瀧」との刻字がある。左の道は青根ヶ峰の山頂を越えて西河へ下りる道、すなわち朝方に登ってきた道であり、右が奥駈道である。現在では右側の道は重機を用いて整備された大がかりなものとなっていて、いにしえの面影は失われている。しかし、江戸時代よりこの場所が分岐であったことは、この石碑によって推し量ることができる。

この石碑がいう女人結界についてだが、この場所より青根ヶ峰山頂が結界であると言っているのか、それとも山上ヶ岳方面が結界といっているのか、あいまいである。碑面の向きを厳密に考えれば青根ヶ峰の山頂が結界であるようにも思われるのだが、それであれば反対側、すなわち西河から登ってきたところに別の結界碑があるはずだが、それは見当たらない。西河方面からは往時はほとんど利用されることもなかったので結界碑を置くにまでもなかったということなのだろうか。

あるいは、奥駈道の山上ヶ岳方面の結界を示しているのだろうか。よく知られているように、山上ヶ岳大峯山寺は女人禁制を貫いている。今日では五番関より奥、洞川の清浄大橋より奥、あるいはレンゲ辻より奥などに女人結界が設けられているが、聞くところによれば、時代の要請に従って結界の範囲は後退しているらしい。洞川の清浄

黒滝村の境界標柱と福喜講の碑

大橋等は、現在の結界がそこに設定されているにすぎないとのことである。かつては山上ヶ岳の大峯山寺を起点にすると、もっと離れた場所に結界碑が建てられていたことになるわけである。青根ヶ峰の下の 1 基のその名残なのかも知れない。

ところで青根ヶ峰の結界碑の傍らには 1 体の石地蔵が置かれている。そしてその基部には靡に供える剣札がたくさん並べられている。71 番靡の金精大明神は現代の理解に即するなら、先に触れた通り金峯神社になるのだが、それであれば剣札は拝殿に供えられるはずである。それがこの場所にかためて置かれているところから推測するなら、奥駈ではこの分岐の先にある青根ヶ峰の山頂が金精大明神と意識されているのだろうか。ちなみに、一等三角点の標石がある青根ヶ峰の山頂には剣札は見られなかった。

あるいは、奥駈の 70 番靡は愛染宿なのだが、剣札が供えられているのは金精大明神に対してではなく、愛染宿跡なのかも知れない。西行庵と並べられることから奥千本の方にあるものと思っていた愛染宿だが、この分岐のあたりにあったのだとすれば、この場所の剣札にも納得がいく。

さて分岐でルートを右に進むと、数分で舗装路に合流する。青根ヶ峰の山頂を迂回して南進する舗装路である。奥駈道もしばらくはこの舗道を進むが、すぐに右手で山道に入る。近畿自然歩道として整備されているハイキング用の山道である。しかしこの箇所では舗道をそのまま進んでも問題はない。今回は近畿自然歩道の山道を歩いてみたのだが、山道は十数分程度で再び舗装路に戻るからである。あまりにも長々と舗装路が続いていたり、極端な遠回りを強いられたりするのは嬉しくないが、時間的に短く、距離的にも大差がないのなら山道に固執せねばならないわけではない。

山道が舗装路に合流したところ（舗装路目線で言うと「舗装路右手から山道が合流してくるところ」）を過ぎた先、その右手に「黒滝村」と書かれた大きな標柱と「福喜講」と刻まれた石碑が現れる。歩くだけでは実感できないが、広域の地形図で俯瞰すれば奥駈道は大峰山脈の脊梁部分を忠実に辿っていることが分かる。そしてその稜線に沿って行政の境界線が引かれていることも少なくない。この箇所についていえば舗装路が境界線とほぼ重なっており、東側が川上村で西側が黒滝村で

ある。黒滝村の標柱が舗装路の右側にあるのも、この道から右（西側）が黒滝村であると告げているのである。

この黒滝村の標柱のすぐ近くにある「福喜講」の碑に関しては詳細不明である。講を組織して奥駈道を歩いた人々が設置したものだろうことは推測できるが、碑面には大阪という地名および十数人の氏名が確認できる程度で、それ以上のことは分からない。大和葛城山でも山頂のすぐ下のところで「開通講」と刻まれた石を見ることができるのだが、地域で講を組んで山に登り、その参拝登山が無事に実施できた場合には、お礼の意味からか、こうした石碑を置く習わしがあったのだろう。

標柱を過ぎて歩き続けると、今度は舗装路が二股に分かれる箇所にやってくる。分岐にはやたら情報量の多い道標が立つ。左に進めば川上・天川方面と大峰山で、右へ行けば黒滝村役場・黒滝森物語村・吉野路 309 総合案内センター・きららの森・赤岩とのこと。指示にある一々については把握していないが、左が進路なのは明らかである。一応の確認で地図と照合すると当該舗装路から細い林道がくねりながら黒滝村の中心エリアへと続いている。進路確認だけでなく、現在地確認にも役立つ道標である。

この分岐を過ぎるとほどなく左手に近畿自然歩道の道標が現れ、舗装路から分離する山道が確認できる。当面の目的地は大峯山寺あるいは次の靡（69 番）である二蔵宿跡なので、中間は楽な道を歩くに越したことはないとするのも 1 つの見解である。しかし、山岳修行でもある奥駈のつもりで歩いているのだという気持ちの部分を重んじるなら、ここは四寸岩山の山頂も含めた稜線を忠実に辿る方を選ぶべきだろう。ちなみに舗装路の方は山腹をかなりの長さで大回りした後に二蔵宿手前で山道と合流する。

さて初日となったこの日は、メインのテーマは四寸岩山を越えてどこまで距離を伸ばせるかである。できるだけ大峯山寺に近づいておきたいし、どこまで近づけるかによって翌日からの予定も変わる。吉野山を後にしてしばらくは歩きやすい道が続くのは机上のプラニングでも確認できていたので楽観的な予測はあったが、四寸岩山のあたりからは、実際に歩いてみた結果でのペース判断も必要になる。目標は二蔵宿跡に建てられている百丁小屋だった。しかし、その一方で、強行軍と長時間行軍かつハイペースを前提にすれば五

雨天行軍に救いの手、足摺宿の避難小屋

番関ぐらいまでは可能だろうし、望むらくは洞辻あたりまでという目論みも持っていた。

コースタイムの目安は、昭文社の「山と高原地図シリーズ・大峰山脈 2017 年版」に依った。ただ昭文社のコースタイムは、山小屋利用の装備で夏山晴天時が前提なので軽量×好条件の設定である。それに対して今回の装備は簡易テントと 5 泊分の食糧を担いでいる。軽量化の工夫は施しているものの、昭文社の基準に比べると重く背負っているはずである。平坦な舗装路では荷重差は問題にならないが、山道の登りが続くと違いが歴然と現れる。加えてこの日は山道に入ったあたりからポツポツと雨が降り始めた。ポツポツのうちはよかったが、勾配が強くなるあたりから雨脚が激しくなって条件はますます悪くなる。その後の雨脚は弱まったり強まったりの微妙な波動を繰り返していたが、そうこうするうちにコースタイムに比して約 20 分遅れで四寸岩山への到着となった。山頂は木立に囲まれた小さな広場に標識がぽつんと立っているだけの場所である。条件が良ければたいした印象も残さず、淡々と歩いているうちに到着しましたというだけのレポートで終わるだろう。ただ、この時はやっとたどり着いたという思いが大きかった。

なお今回の奥駈チャレンジでは、道中での電波状態（ドコモ）を随時にチェックしていたのだが、金峯神社を中心とした吉野山エリアではかなりいい状態だった。それに比べて、稜線の舗装路を進んでいる間は格段に電波事情が悪くなり、時折思い出したようにアンテナマークが出現する程度になっていた。四寸岩山でも改めて確認すると、偶然かどうか分からないが、電波状態は改善されている。安定して 3 本のアンテナ表示が出ていたので、ＳＮＳへの書き込み等もやってみた。

そんなこんなの細かい作業を片付けているうちに、再び雨脚が強くなってきたので慌てて再スタートをする。雨具を着ているとはいえ、顔の前にも滴がひっきりなしに落ちてくるぐらいになり、心地よいものではない。木暗い山道という状況的なマイナスも加わって気分はますます鬱へと向かう。

そんなタイミングで目の前に小屋が見えてきた。足摺宿である。足摺宿は屋内が土間になっていることや近くに水場がないことなどから宿泊には不向きである。しかし、すでに水も滴る濡れ鼠になっていたこともあって躊躇わ

ず行動を終える。当初の目標が最低でも百丁小屋だったことを思うと、ヘタレ方が著しいがやむを得ない。

トタンの屋根を叩く音から判断するに夜の間も時おり雨脚が強まっていたが、明けて 2 日目は 4 時起床の 5 時スタートとする。初日の遅れを取り戻したいと考えたからだ。足摺小屋を出るとほどなくして舗装路に合流、と思う間もなく分岐。舗装路を直進するか、右手の山道へ入るかの分岐だが悩むまでもない、山道の方には百丁小屋との指示が出ている。

だがここで問題が 1 つ生じる。それが水場問題である。足摺小屋では水の補充ができないので、最寄りの水場は百丁小屋なのだが、水場がどこになるのかは事前の情報では正確には特定できない。奥駈道を歩くにあたって水の問題は終始ネックになっていた。百丁小屋や小笹宿のように、水が確保できるとされている場所はコース上でも少なくないが、実際にはどういう状態なのかは訪れてみないと分からない。入手できるつもりにしていたところで水場が見つからなかったとか、水場はあっても枯れていたとかのことが十分に考えられる。積雪期であれば雪を溶かして水を作るのだが、営業小屋の少ない稜線コースの場合は博打になってしまう。そのため不安要素がある場合は担いで歩く水の量を多めにせざるを得ない。一種の危険負担である。日帰りハイキングであれば考える必要のない要素だが、泊まりがけのプランになると深刻な問題となってくるのが、こうした水問題なのだ。

百丁小屋の水場に関していえば、ネットで見かけるレポートでは小屋から数分のところらしいが、具体的な場所は分からない。一方、昭文社の地図では小屋の近くというよりは、舗装路の傍らにあるかのように水場マークが付いている。5 万分の 1 の縮尺なのでピンポイントの厳密さを求めるわけにはいかない。それでも確認の意味で 10 分か 15 分ほど舗装路の方を歩いてみることにする。それで水場が見つからなかった場合は、常識的に小屋のまわりで探してみることにする。

というわけで、分岐のところに立ち戻る。進むべき正解は右の山道なのだが、すぐに引き返してくることを前提に舗装路を歩き始める。そして昭文社が水場マークを付けているあたりまでやってきて、何もないことを確認して分岐まで引き返す。この間、およそ 20 分。その後、山道を 20 分ほど歩いて百

峨々たる山容に描かれた案内図

丁小屋に到着。ここで水の補給と思ったが、初日から多めに担いでいたことや、前日は節水モードで過ごしたことなどから、補充なしで先に進むことにする。というか、本当のところは水場を探しに行くのが億劫だったり、この段階でも 2 リットル弱の持ち合わせがあるので小笹宿までは間に合うだろうとの楽天的判断である。

2 日目の行程では、2 つの登路がトピックになる。ひとつは大天井ヶ岳への登りであり、もうひとつは大峯山寺への登高である。その 1 つ、前者の大天井ヶ岳への登りが百丁小屋を過ぎるとすぐにやってくる。小屋のすぐ南側に分岐があって、最初からガンガンの上り坂となる大天井ヶ岳山頂経由コースと、パッと見ですぐに水平主体の道であることが推察できるトラバース道である。何度も歩いているのなら水平道を利用して時間短縮を目指すことは真っ当な判断だが、今回は行程の概要を理解する意味でも敢えて厳しい側を選ぶ。知ることに重きをおいて、まずは稜線を忠実に辿る正面突破である。

とはいえ、勾配は強く、かなりの距離が続いているので堪える。先に山上ヶ岳までの行程をデフォルメイメージで描いた「吉野古道イラストマップ」なるものが設置されていたが、大天井ヶ岳と山上ヶ岳はまるで山水画に出てくる峨々たる山岳のように描かれている。現実にはそれほどではないにしても、鬱な気分を加速させるには十分である。少し進んでは一息入れ、少し進んでは一息入れの繰り返しでペースも上がらない。そうこうして 1 時間半ほど喘ぎ続けた後、踏み跡は山頂東南側の肩に吸収される。

山頂では一応の儀式をこなすように電波チェックを試みる。足摺小屋では拾えていたが、歩き始めてすぐにアンテナ表示は壊滅していた。昨日の舗装路でも同じような状況だったので、電波を拾わないのがデフォルトと見て間違いなさそうだ。それでも大天井ヶ岳は五番関より北側ではもっとも標高のある場所なので、電波を拾う可能性があるとすれば、この山頂だろうと、期待はしていた。四寸岩山で十分に拾えていたのだから、こちらでも大丈夫だろうと思っていたのである。ところが改めてチェックをしてみると、依然としてアンテナは立たず。さほど広いわけではない山頂のここかしこで方角を変えながら試してはみたが無駄だった。四寸岩山の 3 本立ちはやはり何かの偶然だったのだろう。

衛士岩（勝手に命名）

ともあれ、電波状況については、入らないという事実が確認できただけでも収穫と思うことにして、次の目標地点を目指す。女人結界の五番関である。「五番」というからには、1 番から n 番までの関所が大峯山寺を取り囲むようにあるのだろうと思っていたが、宮家準氏『大峰修験道の研究』が紹介する「大峯峯中秘密絵巻」(天明 7 年,1787 年)という絵図には「御番石」との記述があるとのことである。また依拠する資料は記されていないが、洞川温泉観光協会のサイトでは碁盤目のような模様をもつ岩盤があったことから「碁盤石」というのが元の名前だった旨が記されている。由来はともかくとして、洞川の集落からも稜線上に視認できる明確な鞍部なので、行程上では重要ポイントである。

地形的な特徴でいえば、大天井ヶ岳の山頂を後にしてしばらくは平坦な尾根道を辿るが、門衛を思わせる岩（勝手に衛士岩と命名する）を過ぎると一気に五番関の鞍部まで下る。吉野からの逆峯であれば駆けおりる下り道だが、順峯で辿る場合は強烈な登路となって立ちふさがることになる。百丁小屋から大天井ヶ岳山頂までの登りもなかなかに強烈なものだったが、逆もまた然りというわけだ。大天井ヶ岳が行程上の難所であることがよく分かる。

そうして到着した五番関だが、目の前には大きな門が設えられている。大峰名物といえばそれに当たるだろうか、女人禁制の結界門である。この門より先は女性は入ってはいけないということが信仰または伝統の名の下に受け継がれている。また門の傍らには大峯山寺名義による立て看板があり、いわく「平成九年十月に一部報道機関等により大峯山の女人禁制が然も解禁のごとく報道されましたが、この件につきましてはこれら報道関係の一方的な報道によるものであり、大峰山としては決定も発表もしておりません。大峯山は今まで通り女人禁制でございますのでこの事を遵守されましてご参拝されますようお願いを申し上げます」と。女人禁制の是非については口を挟むのは控えておくが、五番関で結界門をくぐると、いよいよ大峯山寺の懐へと進んでいく。

五番関からは緩やかなな登り道をたどり、次に目指すは今宿跡である。途中、小さな祠の置かれている場所があり、「鍋冠行者堂」との祠号が掲げられている。その場では「ナベカンムリ」とはユニークなネーミングだなと思っ

傍らに鉄鍋をつるした鍋冠行者堂

たのだが、下りてから調べてみると「なべかづき」と読むらしい。なんでも、その昔、修行中の役行者がこの付近で火を吐く大蛇に遭遇した、行者はとっさに鍋を頭から被ることで火炎攻撃を避け、逆に呪術によって蛇を退治した云々。お堂の傍らの木には大きな鉄鍋が幹に結わえられているのだが、こうした謂われを教えてもらうと、なるほどと頷かされる。

そこから先は、今宿跡や鎖が設置されている小さな岩場を越え、少しの踏ん張りが求められる登り坂を越えると、洞辻茶屋の休憩所が見えてくる。大峰登山のメインストリートである洞川温泉からの登山道との合流点である。吉野山への登りを含めて、ここまでやってくるのに 1 日半を要している。超軽量装備で駆け抜けるスタイルなら 1 日もあれば吉野から山上ヶ岳の宿坊群まで行くのも可能とも聞くが、相応の荷を抱えての行程であれば 1 日半を要したのも容赦してもらいたいところである。

洞辻茶屋で出て、次の陀羅尼助小屋を越えたところで、昨日同様、ポツリポツリと冷たいものが落ちてくる。梅雨明け前にやってきたことが間違いだったのか、それとも決まった時間帯に降る驟雨なのか、陀羅尼助小屋に戻ってしばらく待機して小降りになってから歩き始めたが、わらじ替えの碑を過ぎたあたりで強雨モードとなる。しかも、今回の雨は先ほどのもととは比較にならないくらいに激しい。岩場の登路などは表面を水流がほとばしるナメ滝もどきである。本来なら油こぼし、鐘掛け岩、西ノ覗などの行場を紹介する写真を撮ったり、岩場からの眺めを確認したりするところなのだが、雨脚は雨具も用をなさないぐらいにまでなっている。そうなると必然的に余計な作業の一切を切り捨てる。逃げ込むように龍泉寺宿坊着、およそ 12 時半。

龍泉寺宿坊の軒先でひとしきりの思案タイム。雨脚が弱まれば、行程を先に伸ばすには十分な時間が残っている。しかし疲労はかなりのレベルに達している。何よりも 2 日続けての濡れ鼠というのが辛い。山のことだから雨につかまることぐらいは覚悟の上だが、泊まりがけの山行から遠ざかっていることもあって気持ちの萎え方が著しい、ということで選択肢は 3 つ。1 つはしばらく様子を見てからのリスタート案。現時点ではかなり激しい雨だがこれが長く続くとは思えない。いくらか治まってから普通に歩いても小笹宿ぐらい

大峯山寺の山門

までは行けるだろうし、脇宿跡も射程距離内。2 つ目は洞川に下山するリタイア案。もとより奥駈道とはどのようなコースなのかを知るのが目的であり、下見を兼ねた踏査を何度か重ねた後で完走に挑むのが本来のあり方、北半分だけだとしても初挑戦でいきなりの完走を期待するのは、無謀の誹りを免れ得ない。山上ヶ岳から洞川へ下りたとしても当初の目的は果たしたことになっている。3 つ目は、龍泉寺宿坊に泊まり、ゆっくり回復、そして翌日からリセットするというもの。後ろ向きになっているのは気持ちの要素が大きいのなら、快適な環境で身体を休めて仕切り直すのも一案である。

簡単に結論はでなかったが、リセット案を選ぶにしても予約なしでの宿泊が可能なのか、宿代がどのくらいなのかで話は変わる。ということで、訊ねてみると、原則的には要予約だが飛び込み一切不可というわけではない、1 泊 2 食に風呂付きで 8000 円也。気持ちの面で折れていたということ、現実的なレベルでこの料金ならという判断、それに訊ねた後で止めますとも言いづらい等々の事情が絡まって、龍泉寺宿坊でお世話になることにする。

さて、そういう日和った形で 2 日目は行動を切り上げることとなったが、時間の余裕もできてしまった。そこで山上ヶ岳に登った後で、レンゲ辻と山上辻経由で稲村ヶ岳に向かうことにする。事前の予定でも稲村往復は頭の片隅には置いていた。ただ、それは初日に距離を稼ぐことができ、余裕をもって山上ヶ岳に到着した場合である。4 時間程度を見ておけば往復できそうなので、余裕があれば稲村ヶ岳へも足を伸ばすというのが事前の想定だったのである。こうした机上プランと比べると、雨につかまって遅々して進まなくなっているのが現実なので、状況的には正反対である。それなら稲村は素直に諦めねばならない。だが昼を少し過ぎたぐらいの時間で行動を終えているという、これまた想定外の事態なので、それなら、いっそのことという思いが湧いてきたのである。

これは大きな反省材料である。私に山登りのイロハを教えてくれた先輩の口癖に「山を嘗めるな」というものがある。簡単そうな山でも状況次第ではいくらでも厳しくなる。小さな油断が大きな事故を招くのである。今回のケースでいえば、2 日続きの雨天行軍で疲労がたまっている。だからこそ昼過ぎでも行動を切ろうとしたのである。

山上ヶ岳から眺める稲村ヶ岳

なのに、あえて稲村ヶ岳を向かおうとしたのは、稲村ヶ岳ぐらいならちょこちょこっと足を伸ばすだけでクリアできるという思いがあったのだろう。これは油断以外の何物でもない。

さて、反省の弁はこのくらいにしておいて、実際の行動の方を報告しておこう。まず大峯山寺の本堂参拝や山上ヶ岳の三角点探しその他に手間取り、レンゲ辻に向けて出発したのが 2 時前になっていた。余裕を持った行動を心がけるのなら、この時点ですでにアウトの宣告は出ているようなものである。山上ヶ岳から稲村ヶ岳へは往復で 4 時間、日照状態は 7 時前ぐらいまでなら歩くことができるとはいえ、6 時あたりが通常の行動限界だろう。宿坊での夕食も余裕を持ってというニュアンスで 6 時にお願いをしていたのだが、稲村ヶ岳に向けて出発する時点で、かつかつの時間となっていたわけである。途中で天候が崩れでもしたら想定の時間はズレこんでくる。そして、そういう時に限って不安は的中する。レンゲ辻で休息をとっている時に雨脚が強くなり、結局、土砂降りの中で稲村ヶ岳に到着したのは 4 時を少し回ったぐらいだった。展望台に上ってもぐるっと見回す限り霧ばかりで、普通なら目の前に山上ヶ岳が見えるはずだし、大天井ヶ岳や四寸岩山などの確認もできるだろう。転ずれば弥山や八経ヶ岳も視認できると思うのだが、この時は景色もへったくれもない。ということで早々に退散である。レンゲ辻からの登り返しが堪えたこともあって、6 時を越えたぐらいにヘロヘロになって龍泉寺宿坊に戻る。ずぶ濡れかつ這々の体での帰着となった。

奥駈 3 日目。連日の濡れ鼠モードだったので、この日はゆっくり目の出立にして行程も短めに設定する。疲れた身体に鞭打って頑張れば弥山まで届いたかも知れないが、体力と気力の回復を優先して行者還小屋を目標にする。

実を言うと、前日の夜の段階では、諦めて下りる気満々の状態になっていた。しかし、一晩明けて気分も体調もそれなりに回復、そして天気もスカっと晴れ上がっている、となると下山理由は消えてしまう。ということで、前日と同じ道を辿って山上ヶ岳の山頂へ、そして小笹宿へと向かうのだが、ハテ？道はどっちだろう？

奥駈道は、踏み跡もしっかりしているし、マーカーも多いので道に迷うことはほとんど考えられないが、問題が起こるパターンは 2 つある。1 つはタ

ダっ広い場所で方向の見当がつかない時。舗装路なら言うに及ばないが、山道であっても道の形状は安定しているので方向を見失うことはない。しかし大峯山寺の本堂前や山上ヶ岳の山頂のような平坦で広い場所に出てしまうと、方向探しに苦しむことはある。本堂前から山上ヶ岳の山頂に上がる道、山頂からレンゲ辻方面に行く道、本堂前から小笹宿方面に進む道などは、視認できる範囲で道標があるわけではないから、おおよその当たりをつけて道を探し、そこに道標があったら正解、なかったら振り出しに戻るという真似をせねばならない。もっとも地理院地図の最高拡大版であれば建物と道の詳細な位置関係まで表示させることができるので、そういう資料をあらかじめ用意していると問題はおきない。

もう 1 つのパターンは正しい道を進んでいたのに、いつの間にか道が無くなっていることに気づくパターン。これは遭遇した時に具体的に説明する。

宿坊エリアから大峯山寺本堂前の広場に出て、本堂に沿って直進すると右手前方に道標を備えた小道が見えてくる。進むべき道には違いないが、道標が指示するのは「柏木方面」。「え？柏木ってどこ？」

初めて訪れた場所で 1 キロほど離れた先の目的地がどちらの方向にあるのだろうと悩んでいる時に「東京は右、左は博多」と言われたような感じだろうか。地域概念は一通りは頭に入れていたが、把握している範囲に柏木という地名は含まれていなかった。普賢岳だの弥山だのならともかく、最初に飛び込んできたのが柏木だったものだから、少なからず焦ってしまう。ちなみに、柏木とは R169 号線の大迫ダム近くにある集落である。そうした遠距離の場所を指示せねばならないケースも無いではないが、果たして大峯山寺本堂前から奥駈道を先に進むという場合に必要なのかどうか、もう少し気の利いた情報（たとえば小笹宿の方面を指示するなど）があるのではないかと悩むところである。もっともマイカーをアプローチに使う場合は R169 号線沿いにいくつかの起点があり、柏木はその 1 つであるには違いない（柏木を起点にすると阿古滝～小笹宿ルートになる）ので、車族目線での道標であるとも言えなくはない。

ともあれ大峯山寺を後にして小笹宿に向かう。しばらく笹道が続き、乾ききらない朝露がズボンを湿らせ、膝から下はすぐに昨日と同じような濡れ鼠

東の女人結界、阿弥陀ヶ森

になる。それでも雨中行軍に比べると格段に快適である。そうこうするうちに投げ地蔵を過ぎて小笹宿が見えてくる。

投げ地蔵は、75 の靡には入っていないが剣札がたくさん並べられおり、行場相当の扱いを受けていることが分かる。あるいは 66 番靡の小笹宿の行場に含まれるのかも知れない。そのあたりの厳密な事情はわからないが、投げ地蔵の謂われを簡単にまとめると、役行者が地蔵尊を阿古滝に向けて投げ捨てた場所との話になる。山中で修行をしていた役行者の前に地蔵菩薩が顕現したのだが、その顔立ちが柔和すぎたため行者によって投げ捨てられた云々。

恣意的にして乱暴すぎる要約だが、大峰修験道の本尊でもある蔵王権現が役行者の前に影向する物語の前振りであり、蔵王権現に先立って現れた釈迦、観音、弥勒らを衆生救済の本願を託すには優しすぎると考えて役行者が祈祷を止めなかったという部分のアレンジのようだ。ここでいう釈迦・観音・弥勒は、伝説によっては弁財天や地蔵尊に置き換わっており、地蔵尊バージョンの発展型が投げ地蔵伝説になったのだろう。ちなみに弁天バージョンでは、役行者のもとを去った弁財天は天川村に降臨して天河弁天社に祀られているとのことである。

小笹宿は登山者目線でいうと貴重な水場という点でクローズアップされる。だが行者の目線に立つと山中拠点の 1 つであるとともに灌頂の儀式が行われる神聖な場所になるらしい（当山派）。灌頂とは、修行者が悟りを達したと認められて仏となる時に行われる儀式で、頭部に水を注ぐ行為が含まれるという。そうすると小笹宿のすぐ裏手で蕩々と溢れ出ている山下水は秘儀の具なのだろうか。このあたりも詳しくは知らない話なのだが、少なくとも登山者の立場に戻ればありがたい恵みの水であるには変わらない。

そうした小笹宿だが、古い絵図によれば山中の集落を思わせるぐらいに諸堂が描かれており、小笹宿の範囲も竜ヶ岳の北西山腹一帯を占めていたらしい。今日では小さな避難小屋と灌頂堂が 1 軒ずつあるだけで、往事の面影は失われている。コースは避難小屋の脇をすり抜けて竜ヶ岳の山腹を登り、山頂を迂回して阿弥陀ヶ森に向かう。そしてこの阿弥陀ヶ森に東側の女人結界門があり、門のすぐ南側に脇宿跡の碑が置かれている。

このあたりまで淡々と進むことがで

返り見すれば、ガスに隠れる大普賢岳

きるのだが、そこから先の大普賢岳への登りがこの日一番のがんばりどころである。昭文社の地図によれば大普賢の山頂に至るまで明王ヶ岳と小普賢岳の 2 つの小ピークを越えることになっているが、現地を歩いている感覚ではこれらはよく確認できなかった。代わりにというわけではないが、経函岩の方向を指示する標識が目にとまった。経函岩（または経筥石とも）とは、役行者が法華経を収めたとされる石で、伝説によれば行者が経典を入れた後に竜神によって持ち去られ、石だけが残っているのだそうだ。63 番の靡となっているのが普賢岳（大普賢岳）だが、この靡には経函岩を始め、覗や岩が含まれている。大普賢より東に延びる岩尾根には笙の窟があり、これが 62 番の靡で、近くには「石の鼻」や「鷲の窟」などと命名されている岩屋がある（昭文社の地図による）。62 番靡がこれらを一括して含むとすれば、稜線近くに点在する経筥石は 63 番靡の普賢岳を構成する要素になるのだろう。62 番靡の方面に足をのばすことを含め、詳しくは調べることはできなかった。

経筥石の分岐を過ぎ、しばらく歩くと和佐又谷方面への分岐が現れる。和佐又谷は、北山川から分かれて大普賢の東側に切れ込んでいる谷である。この谷に沿って比較的高いところまで進入できる林道があるため、東側の有力なアプローチルートとなっている。この分岐では道は 3 つに分かれ、左を下ると笙の窟、右に進めば大普賢の山頂を迂回して行者還岳から弥山方面、すなわちメインコースを進むことができる。そして真ん中の道が大普賢の山頂に突き上げる急坂に続く。是が非でもその日のうちに弥山まで進まねばならないなどの制約があるのならともかく、靡にも数えられている山頂なので、キツいのを承知で大普賢の山頂を目指す。

約 10 分弱の急登をこなして飛び出した山頂は三角点も置かれた小広いスペースである。ガスのかかるあいにくの条件で、景色は何も見えなかったが、運が良ければ山上ヶ岳方面や弥山方面がよく眺められるはずである。急登の後の山頂だけあって、下りは急下降から始まる。危なっかしい岩場の下降を経て、道が平らかになるとすぐに弥勒岳方面への分岐が現れる。地図で見る限りでは完全に稜線上のピークであり、道もストレートに山頂を越えることになっているのだが、現実の行程で分岐となっている以上はやむを得ない。すぐに山頂があるのだろうと推測して矢

印の指示に従って道を外すと、ほんの 5 メートルも進まないうちに山頂めいた場所に出て、折れた木の元に「弥勒岳」と書かれた山名標も置かれている。コース上の山頂を名乗るには離れているし、かといって縮尺の都合で情報を捨象せねばならない地図ではコースから離して描くのは難しい距離である。

弥勒岳の山頂を踏んで元のコースに戻る。この先は地図によれば薩摩転げの難所だが、見るかぎりは緩やかな笹道が続く。先の方で鎖場や梯子が連続するようになるのだろうが、その前に落とし穴があった。笹道の中に続く踏み跡を忠実に辿っていたはずが気づくとその踏み跡が薄くなっている。どこかで曖昧な分岐に騙されて正規の道を外したのだろう。荷物を置いて前方に続く踏み跡っぽい場所などをうろうろするものの、先へ進んで明瞭な道に戻ることは期待できそうにない。がむしゃらに笹を漕いで稜線まで上がるのも選択肢だが、こういう場合は確実な場所まで戻るのが一番である。数分かけて来た道を戻ると、小さな沢を越える場所で、踏み跡が沢越えと沢沿いの 2 つに分かれている場所に行き当たる。ここで沢を越えてまっすぐに進んでしまったがゆえに、踏み跡の消えるところへ突っ込んでしまったらしい。正しい道は沢越えをせずに斜面を登っていく方である。そちらを選んでしばらく行くと、今度は踏み跡が顕著になり、木の枝にもマーカーが目立つようになる。思うに、道を誤らずに歩いていたとすれば、さほどの印象も残さなったに違いない。しかし、そういう、一見なんでもない場所で道を誤った場合は、間違いに気づきづらくなる。そしていたずらに先へ先へと進んでしまい、最終的には収拾のつかないところまで行ってしまう。辿っている踏み跡が地図と比べて明らかに方角が違うとか、踏み跡の顕著さが今までと比べて曖昧になっているとかの変化に気づくかどうかがポイントである。

今回は緩やかな斜面に続く笹道で、踏み跡の様子が変わってきたことが引っかかっていたのだが、方角的には正しく進んでいた。先の間違った場所で無理矢理に稜線近くまで登ってしまえば正しい道に戻っていた可能性はある。実際、間違いに気づいた場所でも、薄くなってはいたとはいえ、踏み跡が消滅していたわけではない。この間違ったルートを辿りつつも、なお進んだ先のところで正しい道に戻った人が踏んだ跡なのだろう。薄いながらも踏み跡

稚児泊はテント村でも開けそうな広さがある

と認識できる程度には残っているのは、そうした人が 1 人や 2 人ではないことを窺わせる。

正規の道に戻ると、今度は稜線に沿って斜面の西側に鎖場が続く場所にやってくる。いわゆる「薩摩転げ」の難所である。しばらく西側を進んだ後、稜線を越えて東側にまわり込み、数メートルほどの下降となる。ここでも鎖や足場が設置されていて助けられる。鎖等がないと緊張の度合いも高くなりそうで、とりわけ岩場を下る場所では大いに救われる。こうした補助があるので難易度は低くなるのだが、難所と言われる理由は十分に備わっている。ちなみに、地図には「薩摩転げ」の名前だけが記されているが、『大峰修験道の研究』によればこの場所には他にも「蟻戸渡」「内侍おとし」の名前が紹介されている。

これら鎖場を過ぎると、平らな広場に出る。テントの設営も可能なこの場所が稚児泊、60 番の靡である。その先に七つ池、七曜岳と続く。このうち稚児泊は地形的にも明白で標識も設置されているのでわかるが、七つ池はよく分からない。池というからには水たまりぐらいはあるのだろうと思っていたが、それらしきものも見られない。七曜岳についても山頂めいた場所で剣札が並んでいるので想定はできたが明確にそこと断定するのは難しい。その前の国見岳でも、明確に山頂と確認できるポイントを通過した記憶はなかった。地図では山頂地形になっているので山頂はあったのだろう。しかし実際の道はその山頂を迂回していたのかも知れない。いずれにせよ、次の分岐、すなわちメインの奥駈道と無双洞・和佐又方面との分岐までやってくるまでは現在地確認はお預けとなってしまう。

ところで、この日の進み具合はなかなか快調である。途中で道を失うこともあった割には距離も稼げている。このペースなら行者還も越えて先に進めそうだ。弥山は無理でも奥駈道出合ぐらいまでなら行けるかも知れない。と、そんな色気を出し始めたのがマズかったのか、七曜岳を越えたあたりでにわかに空が暗くなったかと思うと雨粒が落ちてきた。

1 ～ 2 日目は、これと似たような感じから強烈な雨脚へと変わっていった。この日は、そのパターンを警戒して早々に雨具を着込み、雨宿りのできそうな木の下で待機することにした。すると思った通りに雨脚が強くなる。そのまま約 30 分ぐらい様子見で待機した

世界遺産登録の影響か、英文の道標もある

後、いくぶん弱まってきたタイミングで行動を再開する。雨に濡れた笹道を大きく下った後、倒木が道を塞いでいる台地状のところを越えると、鞍部の手前にレリーフが設置されているのが目に入る。碑面を読むに、大阪工業大学のワンダーフォーゲル部のもののようだ。昭和 40 年の 5 月に奥駈道を縦走中にメンバーのひとりが疲労遭難を起こした旨が記されている。

大工大レリーフを過ぎると、すぐに分岐の道標が見えてくる。行者還の山頂方面と小屋および水場方面を指示する道標である。雨脚が再び強まってきていたので、とりあえず山頂だけ踏んでおいて分岐に戻り、水場を経て小屋に向かうことにする。地図によれば山頂を越えてそのまま進んでも小屋に到達できるが、水場に関する情報があいまいだったので、まずは水を確保してからと考えたわけである。結果オーライだったが、この判断は正しかった。分岐からしばらく下ったところに水場があり、10 分ほど歩いた先に行者還宿があった。山頂を越えて小屋に入った場合は水を求めて約 10 分ほど戻ることになった。10 分程度というとわずかな時間だが、往復するのなら 20 分はかかるし、天候や疲労度を思うと適切な判断だった。

奥駈 4 日目。歩き始めてすぐに天川辻の分岐に至る。いくらも歩いていないところなのでそのままやり過ごしてしばらく行くと、鞍部状のところで逆方向からやってきたパーティと出会う。洞辻茶屋と大峯山寺の間を除けば、今回は他の登山者に出会うのは稀である。四寸岩山付近で行者さんとすれ違ったぐらいだろうか。この日の行程には弥山が含まれるので、弥山狙いの日帰り組と出会うことが想定されるので、全行程の中でも、山上ヶ岳周辺とともに、賑やかになりそうな日である。鞍部で出会ったパーティも日帰りのようなことを言っていたので大普賢あたりまで行った後で天川辻から下りるぐらいのプランだっただろう。どういう形にまとめるにしても、車をアプローチに使うことができれば、計画の幅は広がってくる。

鞍部でしばらく休憩をしたあと、しなのき出合をこえて一の**垰**に至る。このポイントを過ぎると、ほぼ平坦道が聖宝宿跡まで続く。途中、トンネル西口から登ってくる道と合流する地点（奥駈道出合）および弁天の森を経て約 1 時間半程度で聖宝宿跡に到着。この間は水さえ確保できていれば、出合であ

整備が行き届いた聖宝八丁の登山道

れ弁天の森であれ、テントを張るには困らない。時間の配分が半端になって行者還宿を越えたとしても、無理に弥山まで伸ばす必要はなく、適当なところで行動を切り上げることができそうだ。

ところで、この水平ゾーンの終点、聖宝宿について少し触れておく。現在では聖宝宿が一般的な呼び名だが、古い資料では「講婆世宿」となっているという。講婆世とは人名で、『大峰修験道の研究』には「飛騨国出身の講婆世が僧正の位をのぞんだがかなえられず、この地で帝を呪詛したという」との言及がある。これに対して聖宝とは、いうまでもなく修験道の開祖である聖宝・理源大師である。講婆世を廃して聖宝の名前を掲げるようになった経緯については、帝を呪詛するなどイカンでしょ！とかいった単純な話かも知れないが、それならそれでお行儀のいい名前に変わる以前は、なぜそんな闇のある人物がピックアップされていたのかなど興味は広がる。

なお、この場所には聖宝の銅像が置かれいる。目印にはうってつけなのだが、元禄期に設置されたものと記す資料もあるわりには、かなり新しく見える。こまめに磨き上げられているのか、それとも近年になって新しい像に置き換えられたとのかのいずれかだろう。ちなみに、行者還の小屋にせよ、弥山小屋にせよ、この付近で新しくなっているものは、軒並み平成 2 年の施工だそうだ。平成 2 年、皇太子徳仁殿下の大峰訪問に際して大きく手が加わっているのである。

聖宝宿跡を越えると、聖宝八丁とも呼ばれる長い坂道がくねくねと続く。登山道には階段が組まれて歩きやすいが（これもプリンス仕様か？）、それでもキツいには変わらない。さらに日帰りの軽装備でやってきた人々に軽々と追い越されでもすると気分も滅入ってしまう。六甲の全縦イベントの日に東半分だけに参加する人たちに稲妻坂でひょいひょいと追い抜かれていくのにも似たダメージである。

それでも喘ぎながら長い坂道を登り切ると弥山小屋が目に飛び込んでくる。山頂一帯は公園のように広い。小屋の前にもベンチやテーブルが置かれていて、大休止にはちょうどいい。厳密な意味での山頂は天河神社奥宮がある場所なので小屋から数分ほど離れているが、そこを最初に訪れるか、改めて出発する際に訪れるかはともかく、聖宝八丁をクリアしたご褒美には大休止が

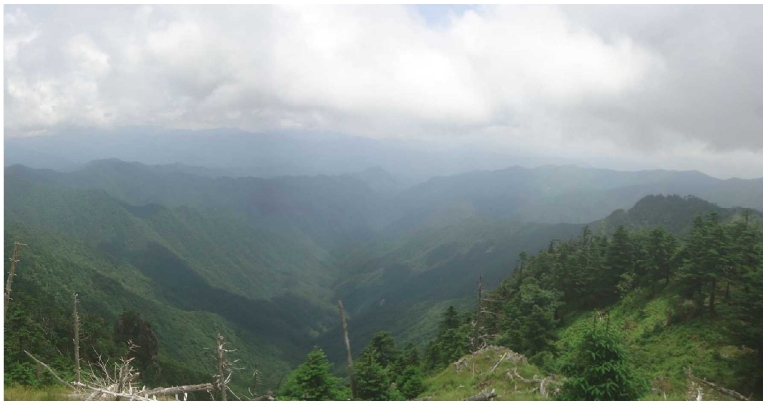
毒のあるバイケイソウ

一番である。

弥山小屋の前でのんびりした後は八経ヶ岳を目指して再出発である。近畿地方の最高峰とかの宣伝文句は勇ましいが、弥山までくると目と鼻の先と言ってもいいくらいなので、大仰に構えるものではない。山頂それ自体はオマケみたいなものだ。むしろ大峰の植物として紹介されることの多いオオヤマレンゲなる花にお目にかかれるかの方が楽しみである。もくれん科の植物でタイザンボクの親戚とのことなのでおおよそのイメージは持っているが現地で見て分かるかどうか。開花の時期もちょうどいいタイミングのようだから、それなりには期待していたのだが、自生地とされる八経ヶ岳北側斜面ではそれらしき花は見当たらなかった。代わりに目立っていたのは地面に生えて 40 ～ 50 センチほどの高さになっているチューリップの葉にも似た植物である。山から下りて調べた結果、バイケイソウという毒草だった。オオヤマレンゲの方は鹿の食害に遭うらしく、自生地区ではネットでエリアを囲んで保全措置が取られているが、バイケイソウの方は毒があって食害から免れているからだろうか、やたら目につく。

そうこうする間もなく八経ヶ岳に到着。別名で八剣山とも仏経ヶ岳とも呼ばれるが、役行者が法華経八巻を収めたというところからの八経ヶ岳が一番しっくり来る。八経ヶ岳の山頂を出て南西側に少し下ると「明星ヶ岳」と記された石の道標が置かれている。だがその場所は明星ヶ岳ではなく、奥駈道と高崎横手・狼平・栃尾辻方面との分岐である。昭文社の地図には「弥山辻」との名前で記されている。世界遺産のマークも入った新しい道標なのだが地名の扱いがルーズな 1 基というべきだろう。もっとも見るからに山頂にあらずとの場所なので間違うことはない。かつ明星ヶ岳の山頂がわずかに外れたところにあることを記した標識が近くにある。そうしたことも含めるなら、どうのこうのと目くじらを立てるほどでもない。

あるいは、こんな考え方もできなくはない。それはピンポイントで山頂だけを指して山を言うのではなく、弥山・明星ヶ岳・八経ヶ岳をひとまとめにしてしまう理解である。確かに名前が付されている以上、弥山は弥山であり、明星ヶ岳は明星ヶ岳なのだろう。それに八経ヶ岳に至っては近畿の最高峰として喧伝されているので、別々の存在と見るのが普通なのかも知れない。し



眼下に見えるのは白川又川の上流域だろうか

かし、弥山から八経ヶ岳までの距離や、それぞれの山頂の間に顕著なコルがあるわけではないことなどを考えると、大きく一まとめにする理解があってもいいように思う。明星ヶ岳の山頂ではない場所に明星ヶ岳と記した道標が置かれているのは、設置者の本当の意図はともかくとして、このあたりをバクっと明星ヶ岳と言っておこうよというおおらかさとみても面白い。

ところで、今回は景色を楽しむことがまったくできていないのは、繰り返し触れている通りである。とにもかくにも天候に恵まれていないからなのだが、雨で視界が遮られる時は言うまでもなく、そうでなくても一面が霧に覆われ、遠くを見やってもどこがどこなのか分からないという有様なのだ。そんな中、明星ヶ岳を越えてしばらく進んだところで稜線から東側の景色が広々と眺められるシチュエーションとなった。東南の方角から谷が稜線の直下まで深々と切れ込んできている。谷が深いのは大峰の特徴だとしても、眼前の谷はいかにも大峰と思わせるだけのスケールである。現在地や方角から推測するに、白川又川の上流渓谷のようだ。だとすれば奥剣又谷だろうか。

行程は 48 番靡の禅師ノ森へと差し掛かる。固有名が付与されていると、なにか特徴があるのだろうと思いがちだが、現実にはなだらかな斜面に続く灌木帯と笹道である。靡の謂われとなっている検増童子の祠というのも、どこにあったのやら。この前後には資料によれば、「禅師宿」「禅師伏拝の祠」「菊岩屋」（このうち菊岩屋は 49 番靡の菊ノ窟のことだろう）などがあるらしいが、確認はできなかった。昭文社の地図には「菊ノ窟遙拝所」というポイントが記されているが、それもメインのコースから少し離れているので、あるいはハイカー仕様の奥駈道と行者仕様のそれとでは厳密には一致しないのかも知れない。

明星ヶ岳を過ぎてからは淡々と距離を稼げているが、雲行きが変わるのは五鈷峯の周りである。机上プラニングの段階では 1 つの通過ポイント程度の認識だったのだが、前半の難所が薩摩転びだとすれば、五鈷峯は後半の難所である。ロープ等が設置されていて安全に通過できるよう配慮されているのだが、鎖場や鉄梯子ではなく、ナイロンロープというのが危なっかしい。いつから残置されているロープなのか分からないので、軽率に体重を掛けでもすると、ブンッという音が鳴って切れ

名にし負うといった偉容を見せる五**鈷峯**

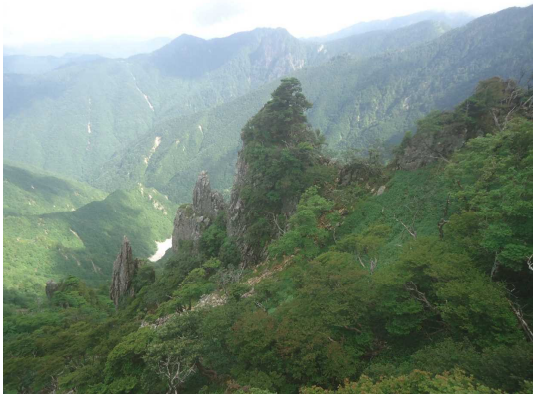
てしまう可能性だってある。勾配の強いルンゼ(溝状の地形)の登り下りを繰り返したり、滑りやすい砂礫の足場をトラバースしたりと、残置ロープを頼らざるを得ないのだが、100 %の信を置くわけにはいかないという状態がしばらく続く。いわゆる残置ロープを騙しながら通過というパターンである。この手のロープ通過をあまり経験したことのない初心者を同行するのであれば、パーティーリーダーが責任もってザイルを用意しておき、新たにフィックスを張りながら通過させるべき場所である（逆にいうとそうした初心者を連れて行くべき場所ではないということ)。

およそ 10 分ほどで五鈷峯を通過し終えて振り返ると、その名にふさわしく、せり上がった小岩峰であることがわかる。横文字で表現するならニードルといったところか。ルートはそのニードルを忠実に登って下りていたのではなくて基部の通過しやすい場所を通っていたのだが、難所にカウントするには十分である。

ちなみに五鈷峯の「鈷」とは密教で用いられる小型剣のような法具であり、形状によって五鈷、三鈷、独鈷などがある。この小岩峰を見て五鈷を連想したところからの命名なのだろう。

五鈷峯を過ぎて緩やかな笹道を下ると、窪地状のところに出る。傍らには石碑があり、たくさんの剣札が供えられている。石碑の文字は読みづらいが「舟」という 1 字は確認できる。舟のたわだろう。この場所は、舟形の湿地とのことなのだが、舟形というよりは船底のような形といった方が正しい。ただやっかいなことに、石碑のある場所が舟のたわであるのは確認できたが、そこから先の道が判然としない。船底にふさわしく、どちらへでも登って行けそうな雰囲気であり、踏み跡程度の痕跡なら方々に延びている。当たりをつけて地図の指示する方角へ進むしかない。それで顕著な道に戻ることができれば正解で、痕跡が薄くなるようなら舟のたわまで戻ってやり直しである。結果、半径 2 ～ 3 メートル程度の範囲で行きつ戻りつを繰り返したあとで正規のルートに戻ることができた。舟のたわは行程上の目印なのだが、その場所で道が見えなくなるというのは想定外の事態だった。

そこから先はトラブルもなく、楊枝ヶ宿に到着する。楊枝ヶ宿の小屋は、行者還同様に施設面では快適な小屋である。水場がやや遠く、かつ水量が心



釈迦ヶ岳手前の岩峰群、椽の鼻だろうか

許ないのがネックになるが、贅沢を言わなければ上等な部類である。4 日目はここで行動を終える。

奥駈 5 日目。釈迦ヶ岳を越えて太古の辻から前鬼への下山日である。細かく見れば、仏生ヶ岳や孔雀岳といった小ピークを越えながら釈迦ヶ岳への大登りという形になるのだが、大天井ヶ岳や大普賢岳、あるいは弥山への登りと比べるなら小粒である。そうした意味では楽な行程なのだが、場所の同定というところへ関心をもっていくと課題は多い。4 日目の行程でも、禅師ノ森周辺では行場や祠などで現地確認のできなかったポイントは多かったのだが、この日は確認すべき場所はさらに多くなる。地名情報の少ない地理院地図でも主要なピーク以外では「椽の鼻」が挙がっており、昭文社の地図になるとルート上にあるものだけで「孔雀覗」「鐺返し」「両部分け」「螺摺り」「杖捨て」「馬ノ背」などが記されている。これにルートから離れるものを加えると「屏風岩」だの「五百羅漢」だの相当数に登る。五鈷峯がそうだったように、それぞれは特徴のある岩場か巨石だろうから、場所の同定がうまくできれば、後々の資料にもなる。

そういった思惑のもと、6 時頃に楊枝ヶ宿を出発する。最初の確認ポイントである「烏の水」は標識も出ており、ほぼルート上で同定できる。この水場も条件のよくない時は枯れるらしいが、補助的な位置づけにしておけば十分だろう。そしてほどなくして孔雀岳。山頂を迂回して西側斜面にルートがついているので、山頂を踏むにはメインのルートを外さねばならない。孔雀ノ覗もすぐ近くで確認できたが、この日も一面に霧が掛かっていたので覗くもへったくれもないといったところである。霧のない条件下ならこの孔雀ノ覗から屏風岩や五百羅漢の岩場などが確認できるらしいが、例によって景色の話はできない。

次に確認できたのが「両部分け」。場所の特徴は事前情報をもっていなかったので、現地の標識で確認できたに過ぎない。この両部分けは、地形的には稜線が深く切れ込んだ鞍部といったところである。ここを挟んで 2 つの世界が分かれるというイメージで「両部」と名付けられたのだろう。あるいは「両峯」とも記されるので、2 つの山塊とでもいったところか。その 2 つの山塊（2 つの世界）とは密教でいうところの「金剛界」と「胎蔵界」だそうである。吉野から両部分けまでが金剛界で、

釈迦ヶ岳の山頂に置かれた釈迦如来像

両部分けから熊野までが胎蔵界なのだとか。登山者目線でいうところの奥駈北部と南奥駈は前鬼（太古の辻）で南北が区切るのだが、全体的なスケールで考えるとほぼ同じ位置といっていい。そして両部分けを過ぎてしばらく登り返した場所に「空鉢岳」と書かれた標識が立っていた。地理院地図はもとより、昭文社の地図でも表記のない山頂である。この空鉢岳の謂われは、大日経を石鉢に入れて携行していた役行者が、経典の方を八経ヶ岳の山頂へ、空になった石鉢をこちらの山頂へ納めた、というものだそうだ。

この空鉢岳の周辺では、空鉢岳も含め椽の鼻や螺摺りなど、地図と同定したい場所が続く。空鉢岳は地理院地図の等高線でも絞り込めるが、椽の鼻や螺摺りについては、どのような地形なのかの情報がないのでよく分からない。地理院地図で「椽の鼻」と記されている箇所の左側（方角でいうと西側）には岩壁マークが描かれている。藤木九三がいうところのゲジゲジである。若い頃の藤木は岩登りの対象となりそうな場所を探すのに、陸軍測量部の地形図に記された岩壁マークを追っかけていたそうで、その行為をゲジゲジ探しと呼んでいたという。実地では空鉢岳の標識が立っていた山頂の手前で西側へ特徴的に張りだした岩峰群があった。この岩峰群が「椽の鼻」なのだろうか。あるいは、空鉢岳の山頂を通り越したあたりにあった、ゴジラを思わせるような巨岩、もしくはその近くで西に伸びた小岩稜、これらのいずれかが「椽の鼻」なのかも知れない。ともあれ、釈迦ヶ岳に至る手前の難所群である。それぞれが特定ができなかったのは準備不足を責められて致し方ない。

そうしてやや急な登りをクリアすると（その手前に「馬の背」との標識が掛かるリッジがあったが、これは神経質になる必要はなかった）釈迦ヶ岳の山頂に到達する。山頂には巨大な仏像が置かれている。釈迦ヶ岳というからには釈迦如来なんだろう。現場でこの釈迦如来立像を見た時は思うところは少なかったのだが、帰ってから調べてみると、大正時代に岡田雅行という天川村の強力が独力で担ぎ上げたものであり、大日岳の大日如来、椽の鼻の蔵王権現（これも後に知ったことで、現地未確認だったのだが、椽の鼻には蔵王権現の像が祀られていたらしい）も岡田が運んだものなのだそうだ。ちなみに、高所に置かれた巨大銅像というと、大台ヶ原の神武天皇像があるが、

毒々しい色に一瞬たじろいだが小さなヤマカガシ？

あれは人夫 30 人掛かりで運び上げた云々の話が伝わっている。

釈迦ヶ岳の釈迦立像がどういう形で運ばれたのか詳しい事情は調べていないが、岡田が伝説の強力だったことを思うと、おそらくは 100 キロを越える荷を背負って山道を歩くこともできたのだろう。その岡田をして数回の往復で運び上げたのだと思われる。大正時代の話だから、今日のような登山道ではなく、杣道程度だったろう。だとすれば普通に行き来するだけでも大変なのだから、尋常ならざる荷を背負い、何度も往復したのは、それだけで物語である。

さて、釈迦ヶ岳を越えると、いよいよ深仙宿である。下りはじめておよそ 1 時間、深仙宿灌頂堂の赤い屋根が見えてくる。なんでもこの深仙は聖護院系の修験道（本山派）では聖地と見なされている場所らしい。醍醐寺三宝院系の当山派が小笹を聖地としてその地で灌頂の儀を執り行っていたように、本山派では深仙が聖なる場所であり、灌頂の儀もここで行われることいなっているという。そうした修験道での意味づけはさておき、奥駈チャレンジ（北半分）も成功が見えてきたことで、気持ちの余裕も出来てくる。大休止を決め込んで、小屋の周りでは近くの水場や行場（香精水や四天岩）などを見て回り、小屋の中では電気がつくことに驚き、などなど 30 分ほどのんびり過ごして、最後の下りに取りかかる。

大日岳については登ることも考えたが「大変危険です」と書かれた標識を額面通りに受け取って、素直に迂回した。というか、この時点で気持ちはすでに下山モードとなっていたので、躊躇うことなく迂回路を選んだ。改めて調べ直して、大日岳の山頂も登り応えのある場所であることを知り、安易にスルーしたことを後悔したものの、後の祭りである。その他、太古の辻に至る途中で、赤色に黒縞の入った小さな蛇（ヤマカガシの子ども？）に出会うなど、いくらかメリハリもあったが、何事もなく 2 時間ほどで前鬼の小仲房に到着した。そこでしばらく休憩した後、さらに 2 時間半ほどアスファルト舗道を歩き、17 時過ぎに前鬼口の R169 号線に到着した。

なお、後に聞いた話になるのだが、前鬼と太古の辻との間では、登りでは迷うことはなくても、下りで道を外してしまう人がいるらしい。階段や梯子があるところでは間違いようもないが、それ以外では確かにマーカーを探して

一応のゴールとなった前鬼の集落

キョロキョロせねばならないところはあった。思うに、ルートの正誤を意識せずに勢い任せで低い方へ下ってしまう人がいるということなのだろう。地形的な正確さを旨とする地理院地図でも道の詳細な形状まで反映されているわけではない。それでも尾根を下るのか、沢を下るのか、あるいは水平にトラバースするのかぐらいの内容であれば読み取ることはできる。そうした手間を省いて目の前の踏み跡を追いかけてばかりいると、あらぬところへ迷い込む危険は高くなる。特に沢筋を下る場合には、人為的な踏み跡と自然に形成された踏み跡っぽいものとの区別は難しい。今回は迷うこともなかったのだが、他山の石となりそうな話である。

◆コースタイム

7 月 9 日　西河～足摺宿
西河蜻蛉の滝 09:37 －登山道入口 09:56 －マガリ谷口 10:08 －尾根道合流点 11:12 －舗道合流点 11:14 －青根ヶ峰 11:31 －金峯神社 12:02 －青根ヶ峰分岐 12:31 －黒滝村標柱･福喜講の碑 12:56 －林道分岐 13:02 －試み茶屋跡標識 13:36 －四寸岩山 14:54 －新茶屋跡/足摺宿 15:25

7 月 10 日　足摺宿～山上ヶ岳
足摺宿 05:07 －林道分岐 05:41（約 20 分林道にて水場探索）/06:09 －百丁小屋･二蔵宿 06:28 －大天井ヶ岳分岐 06:33 －大天井ヶ岳 07:56/08:07 －五番関 08:50 －鍋冠行者堂 09:32 －今宿跡 09:59 －鎖場 10:20 －洞辻茶屋 11:07/11:35 －陀羅尼助茶屋 11:39 －龍泉寺宿坊 12:40/13:25 －大峯山寺本堂 13:33 －山上ヶ岳 13:40 －湧出岩 13:50 －レンゲ辻 14:21/14:30 －山上辻/稲村小屋 15:25 －キレット 15:48 －稲村ヶ岳 16:02 －龍泉寺宿坊 18:00

7 月 11 日　山上ヶ岳～行者還宿
龍泉寺宿坊 06:33 －山上ヶ岳 06:42 －投地蔵 07:39 －小笹宿 07:55/08:10 －阿弥陀ヶ森 08:55 －脇宿跡 09:05 －大普賢岳分岐 10:30 －大普賢岳山頂 10:37/11:02 －弥勒岳 11:33 －薩摩転げ（鎖場）12:25-12:38 －稚児泊 12:42/12:50 －七曜岳 13:25 －無双洞分岐 13:32 －大工大ＷＶ部レリーフ 14:51 －行者還岳分岐 15:03 －行者還岳 15:15 －行者還の水場 15:45 －行者還宿 15:55

7 月 12 日　行者還宿～楊枝ヶ宿
行者還宿 06:41 －天川辻 06:46 －しなの木出合 07:42 －一の多和 07:50/07:58 －奥駈道出合 08:20 －弁天の森 08:56 －聖宝宿跡 09:26 －弥山の肩 10:19 －弥山（小屋・天河神社奥宮）10:40/11:00 －八経ヶ岳 11:39/11:45 －明星ヶ岳分岐（弥山辻）12:01 －明星ヶ岳 12:08/12:20 －五鈷峰 13:16-13:26 －舟のたわ 14:27（ルート探索 15 分くらい）－楊枝ヶ宿 15:25

7 月 13 日　楊枝ヶ宿～前鬼口
楊枝ヶ宿 05:54 －烏の水 07:16/07:25 －孔雀岳 07:38 －孔雀の覗 07:53 －両部分け 08:24 －椽の鼻 08:35 －空鉢岳 08:40 －馬の背 09:29 －釈迦ヶ岳 09:46/10:20 －旭橋方面分岐 10:37 －深仙宿 11:36/12:08 －大日岳分岐 12:34 －太古の辻 12:48 －二つ岩 13:40 －五鬼童住居跡 14:49 －前鬼（小仲坊）14:53/15:10 －七重の滝展望台 16:10 －不動ノ湯看板 16:38 －前鬼口 17:40

踏査距離 57.1km（google マップによる計測）

六田の渡し～金峯山寺黒門ルート
奈良県
宮滝～高城山休憩所ルート
西河
金峯神社
前鬼
前鬼口
金剛山
国見山
山上ケ岳
大台ケ原山
八経ケ岳
釈迦ケ岳
高野山
五條市
橋本市
大阪府
和歌山県
三重県
Google My Maps
地図データ ©2017 Google, ZENRIN

はじめての奥駈（2017.7.9 ～ 13）

2017 年 8 月 21 日
編著：京都クルーズ･ザ･プロジェクト
http://kyoto-cruise.sakura.ne.jp/index.htm
発行者：office34
© office34/Kyoto Cruise The Project 2017